

◎政府インターネットテレビ『徳光・木佐の知りたいニッポン～守りつなぎ広める
日本の心 和食』で和食器の給食、出前授業の様子が放送されています。

うつろい、水の巡り

外が見えないビルでパソコン画面と向かい合い、スマホ片手に電車で居眠り、駅からもスマホの地図をにらみ進むばかり…。筆者が季節の移ろいに接するのは実物ではなく、皮肉にもうつわの文様ばかりです。名月や流星群などを待ちわびることもなくなりました。霧が立ちこめるとき、しんしんとした涼しさに肌が包まれるような感覚はどこに行ったのでしょうか。

青磁という焼き物において至高の色合いを表す「雨過天青」(2016年6月号掲載)、雨上がりの青空のすがすがしさを表しますが、雨上がりの、ひんやりと澄んだ張り詰めた空間も忘れています。水たまりで無邪気に遊ぶことなど、もうできません。潤いと恵みの雨なのに、いつしか移動を邪魔する煩わしい対象となり、雨の降る分だけ感性は枯れます。

日本の水の移ろい

ユネスコ無形文化遺産に登録された和食ですが、特長の一つとして移ろいの表現が挙げられています。移ろいとは何でしょう。考えると、気温の変化に「水」が大きく関わるようです。日本の風土は、海に囲まれ降水量と湿度が高く、中緯度にあるため春夏秋冬の変化がはっきりとした温暖湿潤気候です。霧の都、ロンドンで有名なイギリスも同じ中緯度の島国ですが、日本は夏の降水量が多いため蒸し暑く、水蒸気がさまざまに変化する独特の気候といえます。さらには、川が急流であることからわかるように、勾配の大きな地形で、短い距離で海と高地が行き来できます。「海の幸、山の幸」と表現されるように、海と山の自然に同時に接しやすい地形でもあります。このよう



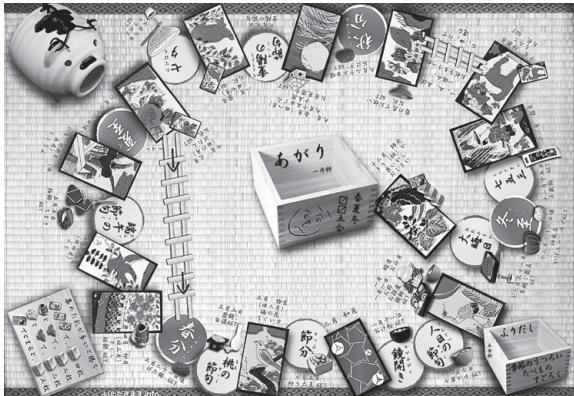
▲江戸中期の龍の口
(山田金右衛門作、長野県下諏訪町・慈雲寺)



►水神 (宮崎県高千穂峡)



▲麦藁の蛇。富士山の代わりに築かれた小さな「お富士さん」の山開き祭で、水神である龍の化身；蛇を模したこの麦藁細工が縁起物として配られる。雨乞いにも関係する (東京都北区・十条富士神社)



◀季節の移ろいに応じて、行事食カードをゲットできる「季節のうつろい・食べものすごろく」(「いただきます.info」HPよりダウンロード可)

▶「これ食べたことない」「じゃあ今度食べようか」と、保護者との会話が交わされていた(2018年6月、食育推進全国大会にて)



に、さまざまに移ろう自然と水は、高低の差により変化の幅を広げ、霧・かすみ・もやなどの言葉に見られるように、わずかな違いが捉えられ、繊細に表現されます。

一方、食の獲得・生産を考えると、狩猟割合の高い欧米に比べ、農耕割合が高い日本では、水の需要のため、水への観察や接し方に敏感なのかもしれません。それぞれの地域・宗教・時代において、水に対する敬いがありますが、うつわにもさまざまな文様による水の移ろいが日本には残ります(2016年7月号掲載)。

水に対する敬いは、今でも龍やその化身である蛇が水神として祀られていることからもわかります。しかし正直なところ、筆者自身、日常生活で水を敬っているとはいえません。現代日本は衛生的な水に恵まれ過ぎており、諸外国に比べて日本人は意識が低いことがよく指摘されています。SDGsでは、世界の17の目標の一つとして水の問題が挙げられており、不衛生な水により1日5,000人の子どもが亡くなっているとレポートされています。

日本の自然観

かつてお祭りの射的の景品には、なぜか花札柄のライターが多く、たばこも吸わないのに子ども心に憧れていきました。その憧れはまだ収まらず、花札があるとふと目を留めてしまします。最近は、花札自体を知

らない子が多いそうですが、花札には日本人の価値観が色濃く出ているといわれます。確かに、武器や権力、または社会の縮図ともいえる職業が示されるトランプやタロット、獅子や一角獣など動物が多い西洋の紋章に対し、花札には花鳥風月、特に季節で変化する植物が多く描かれます。そう考えると、俳句においても「季語」という言葉が必須として存在することは、何とすさまじいことでしょう！ 日本には移ろい抜きでは成立しない世界が広がります。

冷暖房に囲まれ、春の宵・秋の夜長も見落としたままの筆者ですが、自戒の意味を込め作ったのが、花札を配した移ろいのすごろくです(2017年9月号掲載)。実はこのすごろく、まだ未完です。行事などの知識だけであればプログラム化は簡単ですが、移ろいを肌で感じ、敬いへの気づきとならなくては、生きた教材へは至りません。天体が移ろい、冬至・夏至と日の長さと気温が移ろい、風が生まれ、氷・水蒸気と水が移ろい、結果、植物が育まれ、それを共食する動物で構成される自然、これに対する気づきは容易ではありません。せめて目標として、移ろい自然を巡り、旅を愛した2人の句で締めさせていただきます。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

(松尾芭蕉、辞世の句)

願わくは花のもとにて春死なん

その如月の望月のころ (西行)